



Title	カタカナ表記の<機能>に関する一考察
Author(s)	李, 宰錫
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87783
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(李宰錫)	
論文題名	カタカナ表記の<機能>に関する一考察
<p>論文内容の要旨</p> <p>本論文は、日本語の表記体系の一つである<片仮名>に焦点を当て、その根底に内在している機能を把握することを目的としたものである。<片仮名>の機能に関する研究は従来多く行われてきたものの、その機能やイメージの考察は研究がごとに異なり、ややまとまっている状態である。しかし、日本語話者においては<平仮名>と<片仮名>の間に感覚的な違いが存在していると感じており、主に<片仮名>は規範から離れた例外的な使い方が多く見られているものの、それらの間にもある程度の規則は見られている状態である。すなわち、日本語話者は抽象的であるものの<片仮名>に関する明確なイメージを持っていることになる。</p> <p>本論文は、日本語の体系に大きな変化が見られた時期を<明治維新>と<第二次世界大戦後>とに分け、前者を戦前、後者を戦後として捉えて<片仮名>表記の機能を明らかにしたものである。<戦前>の時期においては、<特定の内容は特定の<表記>や<文体>で書かなければならぬ>という意識的な枠組みが存在してことが確認されており、<表記>要素のみを研究対象にしては、この<表記>の機能が<表記>だけのものなのか、それとも<文体>や<内容>から影響を受けてそのように<感じられるようになったのか>が明確にならず、よって<戦前>時期の<表記>機能を明らかにするためには、まず<内容><文体><表記>の三要素の影響関係を先行して明確にしなければならないということで、<三要素の関係>とその中における<片仮名表記の機能>という二つの研究が並列するようにならざるを得なくなつた。全国一律で同じ内容が教えられた<国定教科書>と知識層の<専門雑誌>、新聞の広告欄に掲載された<告知文>という知らせの内容、<連載漫画>を資料として用い、戦前の<三要素の機能>と<片仮名表記の機能>の明確化を図っている。</p> <p>一方、戦後は文の表記が<漢字平仮名交じり>が一般的となり、<片仮名>の地位は更に弱くなった。しかし、規範から離れた例外としての用法は更に増え、<片仮名>の特殊化がより進むようになる。また、戦後は<文体>も<口語体>のみとなつたため、戦前からの<三要素の関係性>は完全に無くなつたといえよう。そこで戦後の<片仮名>機能の概観には、人物の性格などを素早く把握できるようにするための言語的方略である<役割語>という要素を取り組み、その観点から研究を進めることとする。<役割語>は金水敏（2003）が提唱したもので、特定の人物の特徴などを連想させる言葉遣いを意味する。なお、ここには<ステレオタイプ>という要因も絡まつておらず、すなわち漫画作品の中で発話が意図的に<片仮名>で表記することは、特定の側面を強調するための意図的な措置である可能性が非常に高く、それがすなわち<片仮名>表記の根底の機能の一つである可能性が非常に高い、という論法につながる。実際、依田恵美（2011、2013）と拙稿（2017、2019）において<片仮名>表記が<役割語>の要素として機能している可能性を示している。</p> <p>戦前の<三要素の関係>と戦後の<役割語>の中で見られた<片仮名>機能の共通した特徴は、その表記された特定の要素を<ソト化>させることである。<ソト>とは日本の社会的な概念で、自分の属いている集団、及び意識から離れていると認識しているものの相対的な集合体である。<片仮名>表記は<語彙の意味が従来とは異なる意味として用いられていることを暗示する>際に、<意味よりは<音>を強調し、視覚的要素よりは聴覚的要素を強調する>際に、<外国人やロボット、エイリアンのようなく自分の属している社会的バウンダリーの外側の存在、及び社会的に通用しない異常な精神状態であることを強調>する>際に用いられている。なお、これらは英語の<大文字>の役割とも酷似している、二つの言語体系を持っている文化圏では<優劣の違いの一つ>として起こる問題である可能性も示唆した。</p> <p>本論文では、<片仮名>の機能を、特定の要素の<ソト化>として捉えている。しかし、如何なる要素が優先して<ソト化>されるかが明確ではなく、依然として<片仮名>が規範から離れている方略で用いられていることも多々見られている。それらを更に概観することで、<片仮名>の根底にある機能をより明らかにできると思われるが、これらについては今後の課題にしたい。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　　(李　宰錫　)	
	(職)　　　　　　氏　名
論文審査担当者	主　查　　大阪大学　教授　　金水　敏
	副　查　　大阪大学　教授　　岡島　昭浩
	副　查　　大阪大学　准教授　岸本　恵実

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： カタカナ表記の <機能>に関する一考察

学位申請者 李宰錫

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	金水 敏
副査	大阪大学教授	岡島 昭浩
副査	大阪大学准教授	岸本 恵実

【論文内容の要旨】

本論文は、近・現代日本語におけるカタカナ表記の〈機能〉や〈イメージ〉を明らかにしようとするものである。まず近・現代を戦前と戦後（ここでの戦争とは第二次世界大戦を指す）に大きく分かち、それぞれの時代を映し出す代表的な資料を選定して、定量的・定性的な分析をしている。特に戦前の場合、表記は単に表記として読み手にその〈機能〉や〈イメージ〉を伝達するものではなく、〈内容〉と〈文体〉と〈表記〉の三要素の関係性の中で遂行されるので、ある文献が読み手に与える〈機能〉や〈イメージ〉は、〈内容〉〈文体〉〈表記〉のいずれが担うものであるかという点に留意しなければならないとするが、戦後は〈内容〉〈文体〉と〈表記〉の繋がりは分離されていると考え、新たに〈役割語〉あるいは〈キャラクター〉といった概念を重視している。以下、第2章以降の構成と内容についてまとめておく。

第2章「戦前の〈カタカナ〉表記の機能」では、国語教科書、知識系の雑誌、新聞の告知文、漫画を資料として取り上げている。それら資料におけるカタカナ表記の機能をまとめると、(A)教科書におけるカタカナ表記機能：教育という要素のため、機能は明確に見られない (B)雑誌におけるカタカナ表記機能：知識機能の副次的要素 (C)新聞の告知文におけるカタカナ表記機能：公的・電報機能の副次的要素 (D)漫画の発話文におけるカタカナ表記機能：音声機能の副次的要素とまとめられるとする。これらを総合すると、戦前のカタカナ表記の機能は、「公的・知識・音声性質の強化・強調機能」ということになる。

第3章「戦後の〈カタカナ〉表記機能の概観」では、まず語彙単位でのカタカナ表記を分析し、外国、若者、異なるニュアンスを与える機能があり、また発話人物に無知、不真面目（真面目の無さ）といったキャラクターを与えているとしている。次にサブ・カルチャー資料に見られるカタカナ表記を分析し、「ある基準から相対的に離れた、一般的な状態ではないこと」を表出する要素として働いていると述べている。語彙単位の表記と併せて、戦後のカタカナ表記の機能について「一般的ではない性質の強化・強調機能」とまとめている。

第4章「日本語の〈カタカナ〉表記の機能」では、戦前と戦後の状況を総合し、明治期以後のカタカナ表記の機能は、「対象の特定要素の〈ソト化〉機能」とあると結論づけている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、明治期以後の日本語のカタカナ表記の特徴を〈機能〉〈イメージ〉という独自の観点から、一種のプロトタイプ分析を試みている。この目的のために、戦前の資料については主として定量的な研究手法を探り、極めて大量の言語資源にアプローチしている。調査対象となった資料群の中でも、知識系雑誌の三誌や、新聞の告知文、また戦前の漫画資料等については、言語学あるいは文字・表記史の観点からほとんど取り上げられたことのないもので、その調査結果は極めて貴重である。特に、知識系雑誌の漢字カタカナ交じり表記から漢字ひらがな交じり表記への移行時期が、先行文献が明らかにしている総合雑誌の状況に比して10年遅れているという事実をあぶり出した手法は見事であり、日本語の文字・表記研究史に着実な進展をもたらした。

戦後の資料では特にサブ・カルチャー資料として、漫画、ライトノベル、ゲーム等を幅広く涉猟し、カタカナの特徴的な用法を定性的な手法で細やかに分析している。また、論の補強として、電報、モールス信号、アルファベット等の特徴や機能にも着目し、効果的に論に取り入れている。

論の構成はしっかりと構造化されていて、全体の論旨は極めて明瞭である。個々の資料群の特徴を的確にまとめた上で、それらの特徴をさらに高次の観点から抽象化し、総論として〈ソト化〉という大きな枠組みを提示することに成功している。

このように、本論文の成果は評価に値するものであるが、問題がないとは言えない。鍵概念として用いている〈機能〉、〈イメージ〉、〈知識〉といった用語の定義が必ずしも透明なものとは言えないので、論を進めていく中で指示示すものが変容していたり、偏っていると見られるところもある。例えば本論文で言う戦前の〈知識〉は、もっぱら洋学系のものに偏っていて、漢学や国学系については顧みるところがない。また、〈ソト化〉という結論を導くことに性急なあまり、途中の細やかな分析の成果がこぼれ落ちてしまっているように見える点も残念である。ウチ・ソトという二分法は確かに魅力的ではあるが、結局表現対象を二分すればどちらかが、ウチ、どちらかがソトになるというのは分かりやすいものの、結論としてはありきたりと言えなくもない。論文自体の表記の特徴として、< > (山括弧) を多用して鍵概念を際立たせようとしているが、結果としてはむしろ論を読みにくくしているという点も否定できない。

とは言え、大量の資料を博捜し、そこから得られた知見を構造化しようとする力量は確かであり、本論文の最大の魅力とも言える。申請者の研究者としての資質は疑いようもなく、この点で学位申請論文として十分認めうるものと結論づけられる。